

入学試験成績と国家試験成績との関係 ーリハビリテーション学科1～3期生の分析ー

村田寛一郎¹⁾ 堀 秀昭¹⁾ 齋藤 等¹⁾

要 旨：入試方法や入学後教育の改善に資することを目的に、入学試験成績と国家試験成績との関係を分析した。対象はリハビリテーション学科第1, 2, 3期生(270名)とし、入学試験方法別および入学試験実施時期別での国家試験合格の割合の違い、入学試験成績と国家試験成績との相関を検証した。国家試験の合格者の割合は1期生の入学試験実施時期別に違いがみられた($p<0.05$)。また、入学試験成績と国家試験成績との間に有意な正の相関を認めた($p<0.05$)。入試成績が高いほど国家試験の成績が良好である傾向が示唆されたが、入学試験成績が良好でも国家試験不合格となった学生がみられ、早期の入学許可および志望動機の不足がその原因として予測された。早期に入学が許可された学生に対しては、意欲的に学習をする機会を提供すること、また、個々の学生の学力の把握をすることが重要であると考えられた。本学ではチューター制度を取り入れているが、この制度によって、特に学力の下位群に位置する学生に対して、早期から動機付けを行いながら個別的に指導を行っていく必要性が示唆された。

【Key words】 入学試験方法, 入学試験成績, 国家試験成績

緒 言

福井医療短期大学(以下、本学)の学科および専攻は、国家試験の受験資格取得、さらには国家資格の取得に直結する教育課程である。基本理念の一つである「魅力ある専門職業人を養成する短期大学」を実現するため、各教員は教育の方法や内容の工夫、改善、および向上に取り組んでいる。その基本理念に向けての努力の成果の一つとして、国家試験の合格率は明確な指標と思われる。すなわち、「本学の努力の成果の現われ」ともいえる。

ところで、大学全入時代を迎え、進学希望者の学習意欲の低下とともに優秀な学生の選出が難しくなり、入学生の学力格差が大きくなってきていると思われる。その中、本学では優秀な学生を確保するために、オープンキャンパス、模擬授業、病院見学、入学試験の見直しなどが行われてきた。本学における入学試験と在学中の成績および在籍の状況については、新田塚医療福祉センターの第7回および第8回センターフォーラムで、高校時代の

評定平均値および入学試験の順位は入学後の成績と関連があること、留年および退学学生は面接得点が低かったことが報告されている^{1) 2)}。さらに柳澤らは、国家試験合格群は不合格群よりも、学内での多くの科目成績(専門基礎、専門科目)が良かったことを報告している³⁾。また、入学試験と国家試験との関係について、我々は第12回センターフォーラムで、本学リハビリテーション学科1期生を対象に入学試験の実施時期別群でみたとき、国家試験合格の割合に違いがあったことを報告した⁴⁾。以上のことから、国家試験に合格するだけの能力を有しているかどうかという点で考えると、入学試験の実施時期によって異なり、また、入学段階での学生の学力が高いほど、国家試験の成績も高いと思われる。

今回、入学試験の方法や入学後教育の改善に資することを目的に、本学を3年間で修了したリハビリテーション学科1期生から3期生の学生を対象にして、国家試験の結果と入学試験時のデータとの関係を分析したので報告する。本研究の仮説を以下のものとした。

¹⁾ 福井医療短期大学 リハビリテーション学科
(受付日 2011年12月)

1) 入学試験選抜の方法によって、国家試験の成績に偏りがある。

2) 入学試験成績が高い学生は国家試験成績も高い。
もし、これらの仮説が証明されることになれば、本学入学学生の中でも、早期から入試成績下位群に焦点を当てた学生指導が重要になると考えた。

方 法

1. 調査対象

対象は平成 18 年度および 20 年度に入学した本学リハビリテーション学科の第 1 期から第 3 期生で、そのうち 3 年間で修了して国家試験（以下、国試）を受験した学生 270 名（理学療法学専攻 109 名、作業療法学 101 名、言語聴覚学専攻 60 名）とした。

2. 分析項目

国家試験と入学試験との関係をみるために、国家試験の合格結果と成績、入学試験での学力試験の成績を用いた。

各学生の国家試験の成績（以下、国試成績）は、受験後に実施した自己採点による点数を用い、さらに合格基準が 60% 以上であることから満点に対する割合（%）で算出した。

本学における入試方法には、推薦入試、指定校推薦入試、社会人入試、および一般入試の第 1 次募集と第 2 次募集（以下、推薦、指定校、社会人、1 次、2 次）がある。推薦、指定校、社会人の入試は 11 月頃に、1 次は 1 月下旬に、2 次は 3 月下旬に実施されている。また、3 期生より、センター試験の得点を採用するセンター試験利用入学試験の前期と後期が導入されている（以下、センター前、センター後）。センター前は 2 月頃、センター後は 3 月頃に行われている。

調査対象の学生 270 名の入試方法の内訳について、指定校は 33 名（1 期生 8 名、2 期生 14 名、3 期生 11 名）、推薦は 59 名（1 期生 11 名、2 期生 27 名、3 期生 21 名）、社会人は 16 名（1 期生 7 名、2 期生 7 名、3 期生 2 名）、1 次は 120 名（1 期生 53 名、2 期生 37 名、3 期生 30 名）、2 次は 30 名（1 期生 12 名、2 期生 12 名、3 期生 6 名）、センター前は 12 名（3 期生 12 名）、そして、センター後は 0 名であった。今回、推薦、社会人、1 次、2 次、センター前の学力試験の結果を偏差値で表し分析に用いた。

3. 分析方法

国試結果に対する入試方法の影響をみるために、1 期生、2 期生、3 期生における入試方法別の国試合否割合について、独立性の検定（ χ^2 検定）を行った。また、これら入試の実施した時期が 11 月から 3 月と幅が大きいため、11 月に実施した推薦、指定校、および社会人の合格結果を一つに併合して、11 月実施の入試群、1 次、2 次、およびセンター前群に分けて、入試の実施時期別でも同様の検証をした。次に国試成績と入試成績との間の関係をみるために相関分析を行った。また、入試方法別での相関分析も行った。そして、入試方法別に入試成績をプロットして、国試不合格者の順位を数直線で表してみた。なお統計学的有意水準は 5% 未満とした。

結 果

1. 入試方法別および実施時期別国試合否割合

入試方法別（推薦、指定校、社会人、1 次、2 次、センター前）の国試合否者数の割合に関しては、1 期生、2 期生、および 3 期生ともに有意な差は認められなかった（1 期生 $\chi^2 = 8.09$, $p = 0.08$; 2 期生 $\chi^2 = 2.44$, $p = 0.66$; 3 期生 1 期生 $\chi^2 = 5.99$, $p = 0.31$ ）。

一方、実施時期別での国試合否者数の割合に関しては、1 期生では 11 月実施の入試（推薦、指定校、社会人）の合格率は 80.8% で、1 月実施の 1 次は 94.3% で、そして、3 月実施の 2 次は 66.7% で、実施時期における国試合否割合の間に有意な違いを認め（ $\chi^2 = 7.71$, $p = 0.02$ ）、1 月実施の 1 次の合格者の割合が有意に高く（ $p < 0.05$ ）、3 月実施の 2 次の合格者の割合が有意に低かった（ $p < 0.05$ ）（図 1）。

しかし、2 期生では 11 月実施の入試（推薦、指定校、社会人）の合格率は 91.7% で、1 月実施の 1 次は 94.6% で、そして、3 月実施の 2 次は 100.0% で、実施時期における国試合否割合の間に有意な違いを認めなかった（ $\chi^2 = 1.21$, $p = 0.55$ ）（図 2）。

3 期生では 11 月実施の入試（推薦、指定校、社会人）の合格率は 88.2% で、1 月実施の 1 次は 86.7% で、3 月実施の 2 次は 66.7% で、さらに、2 月実施のセンター前は 75.0% で実施時期における国試合否割合の間に有意な違いを認めなかった（ $\chi^2 = 2.70$, $p = 0.44$ ）（図 3）。

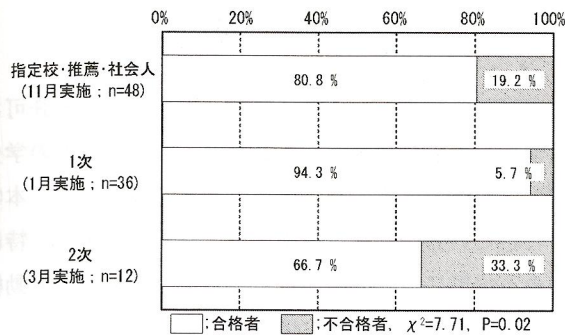


図1：入試実施時期別国試合否割合（1期生）

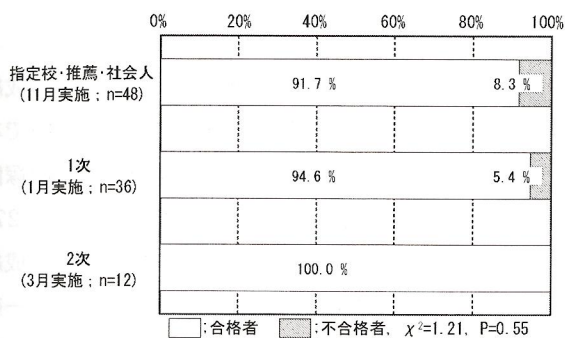


図2：入試実施時期別国試合否割合（2期生）

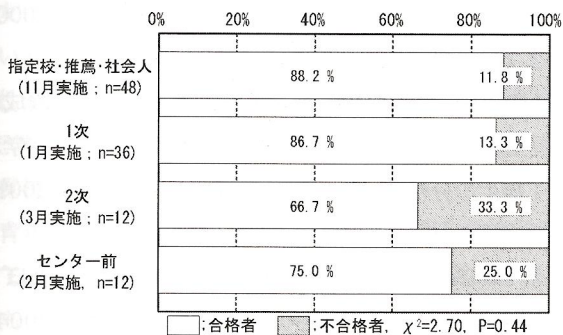


図3：入試実施時期別国試合否割合（3期生）

2. 国試成績と入試成績との相関

国試成績と入試成績との間に、弱い正の相関が認められた ($r=0.34$, $p<0.05$) (図4)。さらに入試方法別では、社会人 ($r=0.66$, $p<0.05$) および1次 ($r=0.38$, $p<0.05$) において相関を認めた。その他の入試方法には相関が認められなかった。

3. 国試不合格者の入試成績の順位

入試方法別に、入試成績の順に数直線上にプロットした結果、下位の方に国試不合格者が位置していた。しかし、推薦と2次では上位にも位置していた (図5)。

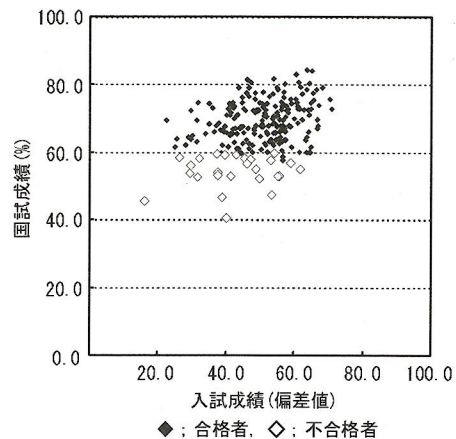


図4：国試成績と入試成績との間の相関 ($r=0.34$, $p<0.05$)

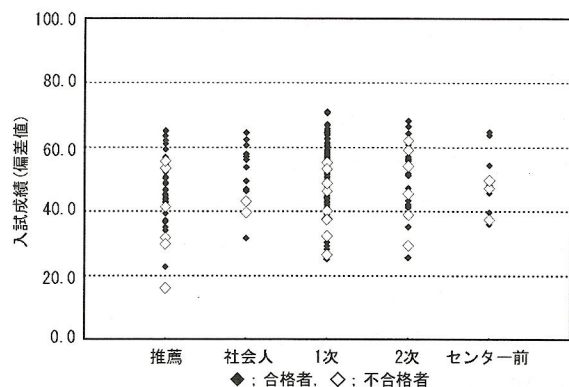


図5：国試不合格者の入試成績の順位

考 察

今回、国試の合否結果を入試方法別に分析を試みた結果、国試合否割合は入試方法別では1, 2, 3期生ともに有意な差を認められなかった。一方、入試の実施時期別では、1期生において国試合否割合に差を認め、11月実施（指定校、推薦、社会人）および3月実施（2次）の入試群よりも1月実施の入試群における合格者の割合が高い結果となった。しかし、2, 3期生においては国試合否割合に差を認めなかった。

1期生での入試実施時期による影響が認められた理由は、まず11月実施の入試（指定校・推薦・社会人）の合格者は、4月入学までの間に能動的な学習の習慣が失われたものと思われる。坂本ら⁵⁾は、入試形態の違いが学業成績に及ぼす影響を検討しており、10月から11月に行われた推薦入試の入学生は1年次および3年次の成績が低く、退学者の出現率が高かったと報告している。

また、三吉ら⁶⁾は、12月上旬に可否が発表された推薦入学予定者に入学前課題を課したところ、学生の半数は1日あたりの学習時間が1時間未満であったと報告している。したがって、1期生における11月実施（指定校、推薦入試、社会人）の学生も同様に、意欲的に学習する習慣が失われてきたと考える。次に3月実施（2次）の学生は第1志望の大学に入学できなかったことにより、本学入学時には学生の学習意欲が低下していることが予測される。

また、2、3期生での入試実施時期による影響が認められなかった理由は、まず1つとして、学生に対してよりきめ細やかな援助をするために、1期生の2年次から小集団の学生に担任教員を配置した指導体制（チューター制）が導入されたことで学生の情意面への充実した援助が影響したものとする。2つめとして、指定校および推薦の学生が1期生に比べて2、3期生で2倍に増えており、第1志望で入学した目的意識が高い学生の割合が多くなっていることが影響したものとする。

国試成績と入試成績との間の関係では、全体的に正の相関が認められ、さらに、入試方法別では社会人と1次に認められ、入試成績が高いほど国家試験の成績が良好である傾向が示された。しかし、これらの相関は決して強いものではないので、今後も調査を積み重ねていく必要がある。

国試不合格者の入試成績順は、比較的下位に集中しており、前述の通り入試成績が高い学生は国家試験の成績も良好であると思われる。しかし、推薦と2次に関しては成績上位にも不合格者が存在した。柳澤ら³⁾は、学力試験を伴わない推薦入学の学生は学力以外の就学継続の意志や国家資格取得に関する意欲面などの要因が一般入学の学生に比べて低下していることを示唆している。これら成績上位の不合格学生はチューター制を導入する以前の学生であり、今回の結果にも同様の要因が影響したと考える。

したがって、学力が下位に位置する学生、早期に入学が許可された学生、および志望動機が不明確になっていると思われる学生に対し、早期からの個別的指導の必要性があるといえる。

結 論

国家試験成績を上げるためには、早期に入学が許可された学生の勉学意欲を維持すること、また、個々の学生の学力の把握をすることが重要であると考えられ、本学で行われているチューター制度をより充実させて、特に学力の下位群に位置する学生に対しては、早期から動機付けを行いながら個別的な指導が必要である。

文 献

- 1) 國兼充代, 福谷保, 齊藤俊彦ら: 本校卒業時の成績から見た入学試験制度第2報～規定の修業年限で卒業した学生と留年者・退学者との比較～. 新田塚医療福祉センター雑誌 2005; 2 (臨時増刊号): 27.
- 2) 齊藤俊彦, 堀秀昭, 國兼充代ら: 本校卒業時の成績から見た入学試験制度. 新田塚医療福祉センター雑誌 2004; 1 (臨時増刊号): 23.
- 3) 柳澤健ら: 東京都立医療短期大学生の入学・在学時成績と医療系国家試験可否との関係. 東保学誌 2000; 2 (4): 16 - 21.
- 4) 村田寛一郎, 山崎京子, 高島良美ら: 入学試験成績と国家試験結果との関係～リハビリテーション学科1期生の分析～. 新田塚医療福祉センター雑誌 2009; 6 (2): 26.
- 5) 坂本亜理砂ら: 入試形態の違いが学業成績に及ぼす影響について. リハビリテーション教育研究 2004; 9: 68-69.
- 6) 三吉友美子ら: 入学前教育の試み - 推薦入学予定者への入学前課題の実施と評価. 看護教育 2005; 46: 896 - 900.